



理事長 依田哲也

社会連携・広報委員会委員長 羽毛田 匡

News Letter No. 20

今回は2024年1月28日(日)に行われた第58回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会について、東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野の日原大貴先生に報告させていただきます。

第58回一般社団法人日本顎関節学会学術講演会報告

「症例から考える－顎関節症を難しくする鑑別診断と治療選択－」

2024年1月28日(日) zoom形式開催

講演の前に、小見山 道 副理事長・学術委員会委員長から、今回の学術講演会の説明があった。

講演1：「顎関節症の病態分類，診断基準とその対応」

小見山 道 先生（日本大学松戸歯学部クラウンブリッジ補綴学講座）

顎関節症の病態分類、診断基準、各病態の病歴と診察について講演がなされた。顎関節症の診断の難しい点として鑑別すべき疾患が多くあることが挙げられ、それぞれの疾患について理解が必要であること、鑑別のためにパノラマ、パノラマ4分割の撮像を行い、慢性化している場合はMRI、CT等による追加の画像検査を行うことが有効となる点について説明がなされた。次に顎関節症の診断手法のDiagnostic Criteria for Temporomandibular Disorders (DC/TMD)の概略と診査手順の注意事項等について分かりやすく解説された。最後に症例を交えて咀嚼筋痛障害（Ⅰ型）、顎関節痛障害（Ⅱ型）、顎関節円板障害（Ⅲ型）a.復位性、b.非復位性、変形性顎関節症（Ⅳ型）の診断基準と治療、その予後について説明がなされた。その中で顎関節症の原因や現在の顎関節症患者に対する治療としての咬合調整に関する考え方等の診査、診断、治療の基礎となる考え方の補足事項についても解説された。

本講演は顎関節症の基本的な対応についての分かりやすい講演であり、診断、治療する際の基礎となる部分を再確認できる貴重な講演であった。

（一社）日本顎関節学会 第58回学術講演会

顎関節症の病態分類，診断基準とその対応

日本大学松戸歯学部 クラウンブリッジ補綴学講座

小見山 道

令和6年1月28日(日)



講演 2 : 「鑑別診断と治療後再評価の重要性」

白田 頌 先生（慶應義塾大学医学部 歯科・口腔外科学教室）

最初に顎関節症の症状に類似した疾患について解説がなされた。構造化問診を用いることの重要性和顎関節の鋭い痛み、鈍い痛み、開口障害について鑑別すべき疾患の具体例を挙げ、その診断に必要な検査、治療法について解説がなされた。鑑別すべき疾患の中にはレッドフラッグとなる疾患も含まれていることから 12 脳神経のスクリーニングの検査を行うことが鑑別において有用となることも説明もなされた。次に顎関節症に起因する頭痛について説明がなされた。顎関節症に起因する頭痛は二次性頭痛に分類され、一次性頭痛との鑑別が必要であり、顎関節症の診断だけでなく、顎関節症との因果関係として同時期に発症している、顎の運動等により増悪する、側頭筋の圧痛等により発症する等を満たす必要があり、筋触診を行うことの重要性について説明がなされた。最後に筋筋膜性疼痛についてメカニズムとその治療について解説がなされた。治療の主体は理学療法でありマッサージ、ストレッチといったセルフケアが主体となること、実施した後は筋痛が改善しているかを再評価することが重要であることが解説された。

本講演は顎関節症の鑑別診断に必要な診査から筋筋膜性疼痛に対するセルフケアの有効性とその根拠の説明までを非常にわかりやすくまとめていただいております。臨床においてすぐ実践しやすく役に立つ内容であると感じました。



講演 3 : 「鑑別すべき疾患の注意点」

石山裕之 先生（東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科咬合機能健康科学分野）

顎関節症の鑑別が必要な疾患についての講演がなされた。まず鑑別が必要な疾患の概略について説明がなされた。咀嚼筋の疾患あるいは障害、顎関節、全身疾患に起因する疾患・障害と鑑別する必要であり、実際には歯原性の疾患であったり、別の疾患であったりする場合があるためその可能性を除外して診断することの重要性について解説がなされた。次に先生が自験された症例を交えて鑑別すべき疾患に関する解説がなされた。顎関節痛、開口障害を主症状とする症例において、左側顎関節滑膜軟骨種、咀嚼筋・腱膜過形成症との鑑別におけるポイントが解説され、いずれも臨床所見に加えて MRI 検査が重要となることが説明された。また頭痛を主症状とする症例においては睡眠時無呼吸性頭痛の診断に至るまでの流れについて説明がなされ、閉塞性睡眠時無呼吸症（OSA）に関する概略、治療について解説がなされた。

本講演は比較的遭遇しやすいと考えられる疾患について実際に診断をつけるまでの流れが詳細に解説されており、実臨床に非常に役に立つ内容であった。また 3 か月以内での治療の再評価も重要である点や構造化問診の重要性を再認識できた。



症例から考える「顎関節症を難しくする鑑別診断と治療選択」

鑑別すべき疾患の注意点



東京医科歯科大学 咬合機能健康科学分野

石山 裕之



講演 4 : 「咬合と関節円板への治療介入」

高岡亮太 先生 (大阪大学大学院歯学研究科クラウンブリッジ補綴学・顎口腔機能学講座)

まず関節円板転位について説明がなされた。前内方への転位が多いが3次元的な転位であることから様々な病態がある旨解説がなされた。次に関節円板に対する治療介入について説明がなされた。関節円板治療介入については咬合関係に変化が生じる場合や追加の歯科治療が必要となるケースもあることから、適応となる可能性がある症例について先生の自験例を踏まえて説明があった。また顎関節の問題に起因する咬合異常の原因と咬合治療が必要だと考えられるケースとについて解説がなされた。また介入の際はインフォームドコンセントが重要であることも併せて解説された。最後に咬合治療の種類と利点と欠点について説明がなされた。顎関節症等による咬合異常は様々な原因で発症し、病態によりマネージメントが異なること、治療によるメリットがデメリットを上回る場合に限り咬合治療は実施されるべきであり、初期治療では控えるべきであることが解説された。

咬合および関節円板に対する治療介入は難しいと感じるが、症例を交えてわかりやすく解説いただいた。特に咬合治療については筆者自身が日々の臨床で大きく関連する部分であり、介入を行うかどうかの判断基準を提示していただき、今後の診療に非常に役に立つ有益な講演であった。

(一社) 日本顎関節学会 第58回学術講演会

咬合と関節円板への治療介入

高岡 亮太



大阪大学大学院歯学研究科 クラウンブリッジ補綴学・顎口腔機能学講座

講演 5 : 「医療面接, 鑑別診断, 治療法選択の重要性」

西山 暁 先生 (東京医科歯科大学 総合診療歯科学分野)

3つの症例をもとに医療面接、鑑別診断、治療法選択の重要性について解説がなされた。覚醒時ブラキシズムを見逃していた症例について、診断までの流れ、治療法について解説があり、ブラキシズムに関する説明がなされ、睡眠時ブラキシズム、覚醒時ブラキシズムを疑った際の診断に至るまでの流れについて解説がなされた。大開口を制限していた症例についても診断までの流れ、治療法について説明があり、先生が実施されている開口訓練について紹介がなされ、初期治療としての開口訓練の重要性について説明がなされた。顎関節症ではない痛みを咬合治療が計画されていた症例についても診断までの流れ、治療法について説明がなされた。小見山先生の講演でもあった DC/TMD に沿った診査、診断が有用であり、鑑別診断に有用であることが改めて確認できた。

本講演は特徴的な所見を有する患者の治療法の選択までの流れを分かりやすく解説いただいた。患者背景を見極めて対応することが必要であると改めて感じ、医療面接の重要性についても再確認することができた。

日本顎関節学会 第58回学術講演会

症例から考える — 顎関節症を難しくする鑑別診断と治療選択 — 医療面接, 鑑別診断, 治療法選択の重要性

西山 暁
東京医科歯科大学 総合診療歯科学分野
東京医科歯科大学病院 顎関節症外来



全体を通じて、本講演内で思い当たるような症例もあり、明日からの臨床に生かせるヒントが多くあったと感じた。診査、診断、治療において迷うことは多々あるが、本講演により鑑別診断、治療法の選択に対する理解が深まり、正しい診断と治療選択につながるものと感じた。